

Title	日中両国文化のかけ橋：漢字およびその略字化 (下)
Author(s)	彭, 沢周
Citation	大阪外国語大学学報. 53 p.1-p.23
Issue Date	1981-10-30
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80843
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

日中両国文化のかけ橋

— 漢字およびその略字化 —

(下)

彭 沢 周

The Connection Between Chinese and Japanese Culture

— Chinese Characters and Their Simplification —

Tse-chou PENG

Contents

- 1) The nature of Chinese characters.
- 2) When did were they introduced into Japan and used by Japanese?
- 3) How to simplify them in China to-day?
- 4) Chinese characters for daily use in Japan and their form.
- 5) Comparison between China's simplified Chinese characters and those of Japan.
- 6) How about their future in China and Japan?

Conclusion

三、漢字の現代日本語の中における位置とその制限

(A) 現代日本語の中の漢字の位置

漢字の日本語の中に占める重要な位置は、すでに前節で、あらまし言及したが、ここでもう一度、この問題をあらためて提出し検討してみたい。周知のように、早く日本文化の黎明期に、漢字はすでに日本語の中に根を下していた。いいかえれば、漢字と日本語はすでに一体となっていたのである。現代日本語の中で、物質文明の進歩や生活内容の豊かさにより、新しい語彙が日ましに増加したが、とくに抽象観念的な語彙は、漢字でなければ明確に表現することが難しい。たとえば、漢字の“愛”で語を造る場合、以下に列記するような語彙があげられる。

愛育 愛玩 愛嬌 愛吟 愛犬 愛顧 愛護 愛好 愛国 愛子 愛唱 愛称 愛嬢
愛情 愛人 愛想 愛息 愛着 愛読 愛用 愛欲

このように、漢字の造語能力はきわめて大きく、日本語の内容を充実させていることがわかる。十余年前、私は“日本語の中でもし漢字を失くせば、どうなるのか。”という問題で、中国文学の大家吉川幸次郎先生に教えを請うたところ、“少なくとも仮名で哲学的な論文を書くのはむずか

抽象的な語彙というまでもなく、具体的な語彙でさえも仮名でははっきりと表わしにくい。たとえば“はし”は“橋”であるのか。“箸”であるのか。“端”であるのか。それとも鳥の“嘴”であるのか。その正確な意味は非常につかみにくい、漢字で書けば一目瞭然である。だから、日本語の中で、漢字と仮名を混ぜて書いた文章は大変読みやすいが、すべて仮名で書いたものは、かえって文として読みにくい。たとえば“にわにはにわにわとりがいる”という文がそうである。漢字を使用して“庭には二羽鶏がいる”と書けば、一目でその意味がわかるわけである。こうしてみると、漢字は日本語の命であり、それがなかったら日本語はぎごちない硬化したものになってしまうといえよう。

鳳 風 計 込 扱 嶠 桎 析 烟 粃 粦 畠 粦 粦 籜 塤 働 攪 櫛 輝 𦵏 癰

魚冬 魚安 魚老 魚伏 魚利 魚威 魚希 魚踊 魚走 魚虎 魚於 魚念 魚弱 魚神 魚雪 魚曾 魚臺 魚片 魚雷

以上の事例から見ると、漢字は日本語の中で、あるいは日本人の生活の中で一日として欠くべからざるものである。現在の日本の国名、人名、地名、政府の機関名はひとつとして漢字で記されないものはなく、またそうでなければ判然としないのである。

最近、ある言語学者たちが現在の日本語の語彙の調査を行なったところ、日本人の日常生活の中で使用される中国語は、日本語の中の55パーセントを占めるという結果を得たという。いいかえれば、中国語は、日本人自身の言語、いわゆる“和語”よりも多く使われているということである。中国語はいうまでもなく、漢字で表記されたものである。今、その統計表を以下に記す。

現代日本語の中の単語統計表

	《言海》(明治24年)		《明解国語辞典》(昭和18年)		《角川国語辞典》(昭和44年)	
	語 数	%	語 数	%	語 数	%
日本語	22,281	57.0	15,002	37.2	22,366	37.0
中国語	16,270	41.6	23,963	59.3	33,143	55.0
外来語	551	1.4	1,428	3.5	4,709	8.0
合 計	39,103	100.0	40,393	100.0	60,218	100.0

(実藤恵秀著《近代日中交渉史話》p. 348, 春秋社1973年)

中国語は日本語の中で、これほど重要な位置を占めており、しかも今後、日中両国関係がますます緊密になるに従って、中国語の日本語の中における数はおそらく日々増加こそすれ、減少するということはないであろう。

(B) 日本語の中の漢字の制限

漢字は日本語の中できわめて重要な位置を占めているが、無制限に漢字を使用すれば、将来、一般の人が漢字を学習する時、多くの困難をとまなうことになるであろう。明治維新後、教育を普及させ、日本の近代化を推進させるため、使用する漢字の数を制限するよう主張した学者は多かった。その中で、1872年(明治6年)、福沢諭吉は彼の著作《文字之教》の序文で、このようにいっている。

日本に假名の文字ありながら漢字を交へ用るは甚だ不都合なれども、往古よりの仕来りにて全国日用の書に皆漢字を用るの風と為りたれば、今俄にこれを廃せんとするも亦不都合なり。(中略) 時節を待つと唯手を空ふして待つ可きにも非ざれば、今より次第に漢字を廃するの用意専一なる可し。其用意とは文章を書くに、むづかしき漢字をば成る丈け用ひざるやう心掛ることなり。むづかしき字をさへ用ひざれば、漢字の数は二千が三千にて沢山なる可し。²²⁾ 当時、福沢は千字の漢字で《第一文字之教》、《第二文字之教》、《文字之教附録》という三冊の本を書きあげている。これは、明治初期の、最も少ない字数の漢字で書かれた著述ということができ、その影響は大きかった。

明治初期、尋常小学校および高等小学校の国語読本に使用された漢字の数は1,862字である。²³⁾ 1902年(明治35年)、文部省は国語調査委員会を設立し、漢字の対策を検討した。1931年(昭和6年)に、文部省の臨時国語調査会で1,858字の常用漢字が決められると、当時の全国の各新聞は、その常用漢字を基準とした漢字を使用した。その漢字数は、たとえば《朝日新聞》(東京)は2,121字、《毎日新聞》(大阪)は2,490字、《報知新聞》は2,571字である。²⁴⁾

1934年(昭和9年)に国語審議会が設立され、文部省の諮問機関になった。1942年(昭和17年)

審議会は《標準漢字表》を公布し、標準漢字を2,669字とした。漢字数の増大は、あきらかに日中戦争の影響による。大太平洋戦争終結後、すなわち1946年（昭和21年）11月、国語審議会は新たに《当用漢字表》を制定し、当用漢字1,850字を公布し、内閣の訓令として全国で実施された。1948年には、さらに教育漢字881字が公布されたが、これは当用漢字1,850字の中から選びだされた比較的学びやすい漢字であり、小学児童が六年間に必ず読めなくてはならないものとした。各学年の漢字配分は以下のとおりである。小学一年生46字、二年生105字、三年生187字、四年生205字、五年生194字、六年生144字の計881字である。後に、児童の閲読能力を強めるため、1971年（昭和46年）に、教育漢字を115字ふやし、合計996字とした。その各学年の配分は次のとおりである。小学一年生76字、二年生145字、三年生195字、四年生195字、五年生195字、六年生190字。新しく増えた115個の新教育漢字は、いうまでもなく当用漢字から選ばれたものである。

日本人の名に用いる漢字でいくつかの漢字は、中国と同じく姓や名以外にはほとんど用いられない。これらの漢字は当用漢字に収められていないけれども、事実上なくすわけにはいかない。そこで、1951年（昭和16年）内閣は当用漢字以外の92字の漢字をもっぱら人名に用いる、いわゆる人名漢字として公布した。1977年（昭和52年）になると、さらに28字の人名漢字を加え、計120字の人名漢字を当用漢字1,850字につけ加え、合計1,970字とした。これは、現在、日本で法令や公用文書、新聞雑誌に使われている漢字であって、学術専門著作に使われる漢字はこの限りではない。

1977年1月21日、国語審議会在《新漢字表試案》を発表した。この試案の特徴はすでに三十年間使用されてきた当用漢字の中の33字を削除し、別に当用漢字の中にはなかった新しい漢字83字を追加したことである。当時の日本の一般世論としては、この試案に反対を表明した人が多かった。とくに“芋”，“畔”，“痘”，“迅”，“遵”などの字の削除に対してである。その結果、国語審議会はこの案に修正を加え、1979年3月28日に、当用漢字の中の19字を削除し、別に95字の新しい漢字を追加し、計1,926字の漢字（すなわち1,850－19＋95＝1,926）の《常用漢字表》を提出した。

今、追加された95個の新しい漢字および削除された19個の漢字を以下に列挙する。

(1) 追加された漢字95字。

抹	漠	濯	尚	隅	猿	悠	猫	塚	甚	溝	拐	泡	搭	仙	傘	喝
岬	肌	棚	宵	溪	凹	羅	頻	漬	据	昆	涯	俸	棟	栓	肢	褐
妄	鉢	挑	繩	蚩	渦	竜	瓶	亭	杉	崎	垣	褒	洞	挿	遮	缶
厄	披	眺	壤	嫌	靴	戾	雰	偵	斉	皿	殼	朴	凸	曹	蛇	頑
癒	扉	釣	唇	洪	稼	梓	塀	泥	逝	棧	渦	僕	屯	槽	酌	挾
堀	把	藻	汁	矯												
磨	礪	駄	塾	襟												

(2) 削除された漢字19字

畝 翁 脹 且 婆 爵 鍾 銑 虞 朕 侯 匄 薪 但 嚇 奴 勺
隸 帥

上記の追加された漢字95字についていえば、多くは政府機関で使用する専門用語に使われる字である。たとえば、法務省でよく使われる“弾劾”の“劾”や、“陪審”の陪，“法曹”の“曹”，“拐帶”の“拐”など、防衛庁の“駐屯”の“屯”，“搭乗”の“搭”などである。また削除された漢字19字についていえば、まれにしか使われないので削除されたのである。たとえば，“且”と“但”は、仮名で代用できる。“虞”は、法令には使われないし，“脹”は“張”で置きかえられる。“勺，畝，匄”などに至っては、すでに現在の日本の度量衡では使われず，“朕，侯，帥，爵”など官吏の等級に用いる字も時代の流れの中で淘汰された。

しかしながら、この1,926字の常用漢字に対して依然としていろいろ違った意見がある。賛成する者は、字数がまだ充分でなく、もっと増やさなければならない、少なくとも2,500字なければ、学問上の用語を表わすことができないと考える。反対する者は漢字が増えれば増えるほど、児童たちの漢字を学ぶ時の負担が重くなると考える。この二つの意見のうち、どちらが正しいのか、それぞれに一理あり、どちらとも言い難い。

しかし、漢字がもし多くなければ、児童が漢字を学ぶのに、とくに漢字を学びはじめたばかりの児童にとって、確かに非常に大きな負担になる。1950年埼玉県内のいくつかの小学校での調査によれば、文部省で規定した881字の教育漢字のうち、六年を終えた児童たちがマスターできたのは、平均して489字であって、全体の数字の55.5パーセントである。しかも、正確に書ける字となると、そのパーセンテージはさらに低くなる。また、国立教育研究所の1975年（昭和50年）11月から12月までの、全国各地の小学六年生、中学三年生、高等学校二年生の計88校、生徒数17,456人を対象とした調査の結果によれば、“貴重品”という三つの漢字が読めたのは小学六年生で79.6パーセント、中学三年生で93.7パーセント、高校二年生で98.6パーセントであった。また、“講演会”という三つの字が書けるのは、小学六年生で8.8パーセント、中学三年生で29.5パーセント、高校二年生で48.4パーセントであった。²⁵⁾

以上の二つの調査から、私たちはひとつの共通点を発見することができる。それはすなわち、小、中学生たちの漢字学習能力が非常に低く、とくに漢字を読むことより書くことの能力が劣っていることである。このような事実に基づき、漢字を制限する必要があるということが、教育者一般の共通の意見となったが、しかし漢字を制限しすぎても、日本語の表現は硬化しつまらないものになってしまう。このような板ばさみの中で、唯一の解決方法といえば、中国のように漢字の筆画を簡略化するしかない。では、どのように簡略化をしていくのか。

(C) 日本語における漢字簡略化の問題

漢字の字体はきわめて複雑である。その字体も時代の変遷とともに異なる。《康熙字典》に収め

られた漢字には同一文字でありながら数種類の異なった字体のものがたくさんある。とくに手書き体の字では、その書き方はさらにまちまちである。

いくつかの繁体字は実際に書く場合、非常に不便なことから簡略化された。簡略化された字は伝統的な正体字とは異なり、別体字といわれる。1908年（明治41年）文部省国語調査委員会編の《漢字要覧》²⁷⁾では正体字と別体字を数百字書きならべている。今、当用漢字の中からその正体字と別体字を選ぶと次のとおりである。(カッコ内が正体字である。)

礼 (禮)	仏 (佛)	剣 (劔)	麻 (歷)	画 (畫畫)	万 (萬)
岳 (嶽)	鉄 (鐵)	滝 (瀧)	号 (號)	処 (處)	与 (與)
玺 (璽)	糸 (絲)	並 (竝)	粮 (糧)	虫 (蟲)	弃 (棄)
塩 (鹽)	声 (聲)	岩 (巖)	断 (斷)	繼 (繼)	肃 (肅)
辞 (辭)	乱 (亂)	蚌 (體)	麦 (麥)	尽 (盡)	即 (卽)
双 (雙)	灯 (燈)	関 (關)	献 (獻)	属 (屬)	嘱 (囑)
密 (密)	真 (眞)	鎮 (鎮)	慎 (慎)	粘 (黏)	覧 (覽)
為 (爲)	偽 (偽)	参 (參)	惨 (慘)	従 (從)	縦 (縱)
将 (將)	状 (狀)	奨 (奨)	壮 (壯)	荘 (莊)	蔵 (藏)
徑 (徑)	経 (經)	輕 (輕)	莖 (莖)	玠 (珍)	脚 (腳)
旧 (舊)	惡 (惡)	宝 (寶)	顯 (顯)	麗 (麗)	称 (稱)
証 (證)	胆 (膽)	担 (擔)	豊 (豐)	托 (託)	医 (醫)

上にあげた別体字は近代日本の比較的早い時期の簡体字といえる。1946年（昭和21年）11月に、《当用漢字表》が公布されてから、当用漢字1,850字の中の131字を《漢字要覧》を参考にして再び整理し、簡略化した。その字体は以下のとおりである。(カッコ内が正体字である。)

乱 (亂)	併 (併)	仮 (假)	両 (兩)	剂 (劑)	劳 (勞)
励 (勵)	勸 (勸)	区 (區)	参 (參)	嘱 (囑)	围 (圍)
円 (圓)	図 (圖)	墮 (墮)	圧 (壓)	壹 (壹)	学 (學)
実 (實)	写 (寫)	宝 (寶)	対 (對)	届 (屆)	属 (屬)
岳 (嶽)	廃 (廢)	徑 (徑)	悩 (惱)	惨 (慘)	恋 (戀)
択 (擇)	担 (擔)	拠 (據)	挙 (舉)	拡 (擴)	数 (數)
断 (斷)	会 (會)	栄 (榮)	楼 (樓)	枢 (樞)	権 (權)
欧 (歐)	歡 (歡)	帰 (歸)	残 (殘)	殴 (毆)	浅 (淺)
満 (滿)	潜 (潛)	沢 (澤)	済 (濟)	浜 (濱)	滝 (瀧)
湾 (灣)	営 (營)	炉 (爐)	犧 (犧)	独 (獨)	獵 (獵)
献 (獻)	画 (畫)	当 (當)	発 (發)	研 (研)	礼 (禮)
称 (稱)	穩 (穩)	窃 (竊)	並 (竝)	糸 (絲)	経 (經)
総 (總)	絵 (繪)	繼 (繼)	続 (續)	欠 (缺)	声 (聲)

肅(肅)	腦(腦)	胆(膽)	台(臺)	旧(舊)	莖(莖)
万(萬)	処(處)	号(號)	虫(蟲)	蚤(蠶)	蚤(蠶)
覺(覺)	觀(觀)	触(觸)	証(證)	訳(譯)	譽(譽)
読(讀)	変(變)	豊(豊)	予(豫)	弍(貳)	賛(贊)
踐(踐)	軽(輕)	弁(辨辯辯)		辞(辭)	通(遞)
遅(遅)	辺(邊)	医(醫)	釈(釋)	銭(錢)	鉄(鐵)
鉞(鑛)	関(關)	随(隨)	隠(隱)	双(雙)	靈(靈)
余(餘)	驅(驅)	駅(驛)	髓(髓)	体(體)	塩(鹽)
麦(麥)	点(點)	党(黨)	斎(齋)	齒(齒)	齡(齡)

(以上131字)

上掲の略字の中の“莖”→“莖”，“示”→“示”，“與”と“與”→“與”，“𠂔”→“𠂔”，“𠂔”→“𠂔”，“𠂔”→“𠂔”などのような偏や旁，部首の簡略化は，後の新体漢字にとりいれられた。同時にまた，当用漢字の印刷に使用される活字々体は明朝体の字体を基準にするべきことが規定された。

1949年（昭和24年）4月，文部省は《当用漢字々体表》を公布し，字体の選定について以下の数点を指示した。(1) 異体字の統一。(2) 略字の採用。(3) 点画の整理。(4) 印刷字体と筆写字体を極力一致させる。この四つの原則に基づくことを，当用漢字を簡略化する基準とした。

上にあげた(1)と(2)の二項は数種の異体字の中から最も通用し，簡単で平易なひとつの字体を選びだし標準漢字とする。たとえば“嶽”→“岳”，“癡”→“痴”，“獻”→“献”などである。また(3)にはいくつかの異なる簡略化方法がある。そのなかで比較的重要なものをあげると以下のとおりである。

a, “点”や“画”の減少と合併

たとえば“歩”→“歩”，“黑”→“黑”，“儉”→“儉”などである。また草冠“芋”の四面を合体して“芋”の三画にするなどである。

b, 字体の簡略化

たとえば“亞”→“亜”，“舊”→“旧”，“當”→“当”，“實”→“実”，“假”→“仮”，“賣”→“売”，“發”→“発”，“瀧”→“滝”，“齒”→“歯”，“屬”→“属”，“斷”→“断”，“贊”→“賛”，“潛”→“潜”，“戀”→“恋”などである。

c, 部分的省略

たとえば“應”→“応”，“藝”→“芸”，“號”→“号”，“蟲”→“虫”，“聲”→“声”，“縣”→“県”，“醫”→“医”，“餘”→“余”，“絲”→“糸”などである。

d, 部分的変形

たとえば“廣”→“広”，“轉”→“転”，“勵”→“励”などである。

e, 位置の部分的移動

たとえば“默”→“黙”，“動”→“動”，“畧”→“略”などである。

1,850字の当用漢字のうち、以上に述べた数種の方法および原則に基づいて、簡略されたいわゆる“新字体”はおおよそ300字である。ここに仮名五十音順にあげると以下のとおりである。

亜	惡	圧	圀	医	為	尅	隱	榮	營	衛	駅	謁	円	塩	縁	応	欧	毆	桜	穩
亞	惡	壓	圍	醫	爲	壹	隱	榮	營	衛	驛	謁	圓	鹽	緣	應	歐	毆	櫻	穩
仮	価	会	絵	壊	懷	慨	概	拡	画	覚	学	岳	楽	渴	卷	陷	勸	漢	関	飲
假	價	會	繪	壞	懷	慨	概	擴	畫	覺	學	嶽	樂	渴	卷	陷	勸	漢	關	歡
観	氣	既	帰	偽	戲	犧	旧	拠	挙	虚	峽	狭	郷	経	響	曉	勤	謹	区	驅
観	氣	既	歸	偽	戲	犧	舊	據	舉	虚	峽	狹	郷	經	響	曉	勤	謹	區	驅
薰	勲	徑	莖	恵	掲	輕	繼	鷄	芸	擊	欠	県	儉	劍	險	圈	検	権	顯	顯
薰	勳	徑	莖	恵	掲	輕	繼	鷄	藝	擊	缺	縣	儉	劍	險	圈	檢	權	權	顯
驗	嚴	広	効	恒	鉦	号	国	黒	碎	濟	斎	歳	劑	冊	雜	参	蚤	慘	贊	殘
驗	嚴	廣	效	恆	鑛	號	國	黑	碎	濟	齋	歲	劑	冊	雜	參	蠶	慘	贊	殘
糸	齒	児	辞	湿	実	写	舍	捨	釈	爵	寿	収	從	從	猷	縱	肅	処	叙	將
絲	齒	兒	辭	濕	實	寫	舍	捨	釋	爵	壽	收	從	從	猷	縱	肅	處	敘	將
称	焼	装	証	奨	条	状	乘	淨	剩	量	嬢	讓	釀	觸	囑	真	寝	慎	尽	図
稱	燒	裝	證	獎	條	狀	乘	淨	剩	量	嬢	讓	釀	觸	囑	真	寢	慎	盡	圖
粹	醉	穂	随	髓	枢	数	瀬	声	婿	静	窃	撰	節	專	浅	戦	踐	潜	銭	織
粹	醉	穗	隨	髓	樞	數	瀨	聲	婿	靜	竊	撰	節	專	淺	戰	踐	潛	錢	織
禅	双	壯	争	莊	巢	僧	層	総	騷	増	憎	藏	贈	臈	即	属	続	墮	台	対
禪	雙	壯	爭	莊	巢	僧	層	總	騷	增	憎	藏	贈	臈	卽	屬	續	墮	臺	對
体	帶	滯	滝	沢	担	單	胆	嘆	團	断	彈	遅	痴	虫	昼	鑄	庁	聴	勅	壳
體	帶	滯	瀧	澤	擔	單	膽	嘆	團	斷	彈	遲	癡	蟲	晝	鑄	廳	聽	敕	壳
鎮	通	鉄	点	転	伝	当	党	稻	閤	徳	読	独	屈	難	式	惱	腦	拝	廃	賣
鎮	遞	鐵	點	轉	傳	當	黨	稻	閤	德	讀	獨	屈	難	貳	惱	腦	拜	廢	賣
博	薄	麦	縛	発	蜜	秘	姫	浜	敷	譜	弘	仏	竝	辺	変	弁	弁	弁	舗	簿
博	薄	麥	縛	發	蜜	祕	姬	濱	敷	譜	拂	佛	竝	邊	變	辨	瓣	辯	鋪	簿
宝	豐	墨	万	満	黙	訳	薬	予	与	余	誉	揺	謡	来	頼	乱	覧	欄	両	獵
寶	豐	墨	萬	滿	默	譯	藥	豫	與	餘	譽	搖	謠	來	賴	亂	覽	欄	兩	獵
緑	墨	礼	励	霊	隸	齡	曆	歴	恋	練	鍊	炉	勞	楼	録	灣				
綠	墨	禮	勵	靈	隸	齡	曆	歷	戀	練	鍊	爐	勞	樓	錄	灣				

注：以上の新字体のうち、はいっていないのは以下の二種類である。

- (一) 字形変化があまりはっきりとあらわれていないもの、例えば“歩→“步”，“青”→“青”，“黒”→黒”などである。

- (二) “辶” → “辵”, “艹” → “艸”, “衤” → “衾”, “飠” → “食”, “木” → “木”などの部首, 偏と旁を簡略化したもので, “進” → “進”, “花” → “花”, “神” → “神”, “飲” → “飲”, “枚” → “枚” などである。

四、日中両国の簡略化された漢字の比較とその問題点

(A) 簡略化された漢字の比較とその相互関係

新中国の漢字簡略化の以前に, 中国の民間ではすでに略字が広く使われていた。そのような略字の多くはいわゆる俗字, 別字あるいは行書や草書からつくられた略字である。清末の《教育雑誌》創刊号にはすでに俗字採用の建議が提出されていた。同時に, 北京でも“簡字研究会”が創立された。民国成立後, 国語統一準備会が成立し, その第四回大会の時に“漢字省体委員会”が組織された。本稿第二章で述べたとおり, 1935年8月, 国民政府教育部は錢玄同の〈第一批簡字表〉をはじめ採用し, 略字を推進することにした。当時, 略字に関する著述に胡懷琛の《簡易字説》, 杜定友の《簡字標準表》などがあった。それからまもなく, 1936年(民国25年)に容庚(希白)は手書きの《簡体字典》を完成させた。

容庚の《簡体字典》には繁体字を歴代の文献によって簡略にしたものが約4,400余字収められている。しかし手書き体なので, 活字体には適さず, 採りいれることがむずかしかったが, 今, 中国文字委員会が公布した《簡化字総表》の中にはそれがみられる。“體” → “体”, “遷” → “迁”, “猶” → “犹”, “學” → “学”, “條” → “条”, “竊” → “窃”, “為” → “为”, “門” → “门”, “馬” → “马”, “區” → “区”, “陽” → “阳”, “萬” → “万”, “亂” → “乱”, “當” → “当”, “義” → “义”, “傷” → “伤”, “歐” → “欧”, “廟” → “庙”, “燒” → “烧”, “雙” → “双”, “寶” → “宝”, “爐” → “炉”, “黨” → “党”, “臺” → “台”, “盡” → “尽” など。この中で, “体”, “学”, “条”, “区”, “万”, “乱”, “当”, “欧”, “双”, “宝”, “炉”, “党”, “台”, “尽”などの略字は早くから日本の《当用漢字々体表》にも収録されている。

日本は漢字の整理や簡略化の面で, 中国よりうまくいっており成果もあがっている。新中国が漢字簡略化を推し進めていた頃, 中国科学院々長であった郭沫若は, 日本の漢字改革の概況を中国に紹介し, 中国も漢字改革をしっかりとやる決意で, 日本に真正面から立ちむかっていかなければいけないと語ったことがある。²⁸⁾そこで中国は漢字簡略化に際して, 日本の簡略化された漢字を少し採用した。たとえば“国”(中国では本来“國”の俗字に“国”があったが, 中が“王”という字なので, 人民中国ではあまり喜ばしくなく, そこで“玉”という字の“国”が採用されたのである), “来”, “余”などである。

1964年,《簡化字総表》が公布されてから, 中国では全国各地の新聞雑誌, 出版社や政府機関, 学校などで広範に略字が使用され, 略字が繁体字にとってかわり世に通用するようになった。まもなく日本の労働運動や学生運動の中でも, 新中国の略字が流行した。たとえば, “スト権奪回”

“反战斗争”などの標語の中の“权”，“战”，“斗”などの字は完全に当用漢字々体の“権”，“戦”，“闘”の原形からはずれている。

漢字は本来日中両国の共通の文化遺産である。中国が漢字を大量に簡略化し，しかも簡略化の方法が日本とは異なるので，簡略化した字体も日本の当用漢字の字体と大きな差がでてくる。従って，日中両国の文化のかけ橋である漢字は，両国独自の簡略化にともないその字義と字形は，日を追って疎遠になってしまう。いかにして両国の共通の遺産である漢字を統一させていくかという問題は，実に日中両国の識者たちがいっしょになって努力しなければならないことである。

しかし，1964年以前，中国の文字改革委員会が漢字簡略化を推し進めている頃は，日中両国の外交関係が正式に開かれていなかったもので，両国間の学者の交流にはまだ非常に多くの困難がともなった。そこで中国では，中国々内の現実と需要に応じて独自に漢字簡略化をおこなってきたわけで，漢字の国際性という問題にまでは考えが及ばなかったようである。

日本の学者たちは，中国の漢字改革問題については従来から高い関心を寄せている。とくに倉石武四郎先生は中国の文字改革の実情を調査するため何度も中国を訪問し，中国の漢字簡略化問題や《漢語拼音方案》を非常に高く評価した。

中国の《簡化字総表》の中の簡略化された漢字と日本の当用漢字の中の略字を比較すれば，たがいに字体が完全に同じものが約60あまりあり，大同小異のものが約50あまり，違いが大きいものが約100以上ある。

今，日中両国それぞれに簡略化した漢字をえらびだし，参考のため以下に列記する。

日 中 両 国 の 略 字 対 照 表

同 じ も の		異 る も の	
中国の略字	日本の略字	中国の略字	日本の略字
医 yī	医 イ	亚 yā	亜 ア
欧 ōu	欧 オウ	°恶 ě(ě)	恶 アク, オ わるい
殴 ōu	殴 オウ なぐる	°压 yā	压 アツ
庄 zhāng	庄 ソウ しよう	为 wéi, wèi	為 イ
学 xué	学 ガク まな(ぶ, び)	围 wéi	囲 イ かこう, かこむ
岳 yuè	岳 ガク たけ	°隐 yǐn	隠 イン かく(れる)
旧 jiù	旧 キュウ	运 yùn	運 ウン はこ(ぶ)
虚 xū	虚 キョ, コ	°绘 huì	絵 エ かい
狭 xiá	狭 キョウ せま(い)	°荣 róng	栄 エイ さか(える), は(え)

区 qū, ōu.	区 ク	营 yíng	営 エイ いとな(む)
献 xiàn	献 ケン, コン	驿 yì	駅 エキ
携 xié	携 ケイ たずさ(える), たずさわる	远 yuǎn	遠 エン, オン とお(い)
号 hào	号 ゴウ	圆 yuán	円 エン まるい
国 guó	国 コク くに	°盐 yán	塩 エン しお
参 cān, cēn, shēn	参 サン まい(る)	艳 yàn	艶 エン つや
蚕 cān	蚕 サン かいこ	°铅 qiān, yān	鉛 エン なまり
惨 cǎn	惨 サン	°应 yīng, yìng	応 オウ
辞 cí	辞 ジ	樱 yīng	桜 オウ さくら
湿 shī	湿 シツ しめ(る)	°稳 wěn	穩 オン おだ(やか)
寿 shòu	寿 シュ ことぶき	过 guò, guō	過 カ す(ぎる), あやま(つ)
称 chēng chēng chèn	称 ショウ	价 jià, jiè, jie	価 カ あたい
条 tiáo	条 ジョウ	°画 huà	画 ガ, カク
状 zhuàng	状 ジョウ	怀 huái	懷 カイ ふところ, なつ(く)
触 chù	触 ショク ふ(れる)	坏 huài	壞 カイ こわ(す)
嘱 zhǔ	嘱 ショク	扩 kùo	拡 カク
寝 qǐn	寝 シン ね(る)	壳 ké, qiào	殻 カク から
尽 jìn, jǐn	尽 ジン つ(くす), つ(きる)	°觉 jué, jiào	覚 カク おぼ(える), さ(ます), さめる
随 suí	随 ズイ	乐 lè, yuè	楽 ガク, ラク たの(しい)
数 shù, shǔ, shuò	数 スウ かず, かぞ(える)	劝 quàn	勧 カン すす(める)
声 shēng	声 セイ こえ	汉 hàn	漢 カン
跡 jī	跡 セキ あと	关 guān	関 カン せき
窃 qiè	窃 セツ	欢 huān	歡 カン
潜 qián	潜 セン ひそ(む), もぐる	还 huán, hái	還 カン
双 shuāng	双 ソウ	观 guān, guàn	觀 カン
壮 zhuàng	壮 ソウ	气 qì	氣 キ, ケ
争 zhēng	争 ソウ あらそう	弃 qì	棄 キ
装 zhuāng	装 ソウ, ショウ よそお(う)	归 guī	歸 キ かえ(る)
属 shǔ	属 ゾク	龟 guī, jūn, qiū	龜 キ かめ
体 tǐ, tī	体 タイ, テイ	戏 xì	戲 ギ たわむ(れる)
台 tái, tāi	台 ダイ, タイ	伪 wěi	偽 ギ いつわ(る), にせ
担 dān, dàn, dān	担 タン	牺 xī	犧 ギ
胆 dǎn	胆 タン	°举 jǔ	挙 キョ あ(げる)

断 duàn	断 ダン た(つ), こと(わる)	据 jù, jū	掬 キョ, コ
痴 chī	痴 チ	乡 xiāng	郷 キョウ, ゴウ
虫 chóng	虫 チュウ むし	经 jīng	経 キョウ, ケイ へ(る)
昼 zhòu	昼 チュウ ひる	响 xiǎng	響 キョウ ひび(く)
点 diǎn	点 テン	°驱 qū	驅 ク かける
当 dāng, dàng	当 トウ あ(たる, てる)	鸡 jī	鶏 ケイ にわとり
党 dǎng	党 トウ	茎 jīng	莖 くき
独 dú	独 ドク	°继 jì	繼 ケイ つぐ
届 jie	届 とどける, とどく	轻 qīng	輕 ケイ かる(やか), かるい
麦 mài	麦 バク むぎ	艺 yì	芸 ゲイ
蜜 mán	蜜 バン	击 jī	撃 ゲキ う(つ)
宝 bǎo	宝 ホウ たから	°检 jiǎn	檢 ケン
万 wàn, mò	万 マン, バン	权 quán	權 ケン, ゴン
弥 mí	弥 ビ, ミ いやや	°剑 jiàn	劍 ケン つるぎ
余 yú	余 ヨ あま(り, す, る)	°县 xiàn	県 ケン
誉 yù	誉 ヨ ほまれ	°俭 jiǎn	儉 ケン
痒 yǎng	痒 ヨウ かゆ(い)	显 xiǎn	顯 ケン
来 lái	来 ライ く(る)	°险 xiǎn	險 ケン けわ(しい)
乱 luàn	乱 ラン みだ(れる, す, れ)	悬 xuán	懸 ケン, ケ か(ける)
礼 lǐ	礼 レイ, ライ	严 yán	嚴 ゲン, ゴン おごそ(か), きび(しい)
励 lì	励 レイ はげ(む, ます, み)	验 yàn	驗 ゲン
°恋 liàn	恋 レン こい, こい(しい)	广 guǎng, ān	広 コウ ひろ(い)
炉 lú	炉 ロ	矿 kuàng	鉱 コウ
楼 lóu	楼 ロウ	谷 gǔ, yù	穀 コク
°湾 wān	湾 ワン	岁 suì	歳 サイ, セイ
		°济 jǐ, jì	濟 サイ す(む)
		斋 zhāi	齋 サイ
		°剂 jì	劑 ザイ
		杀 shā	殺 サツ, セツ, サイ ころ(す)
		杂 zā	雜 ザツ, ゴウ
		°赞 zàn	贊 サン
		°残 cán	殘 ザン のこる, のこす
		齿 chǐ	齒 シ は

°実 shí	実	ジツ み, みの(る)
°写 xiě	写	シャ うつ(す)
释 shì	釈	シャク
从 cōng cóng	従	ジュウ, ジュ, ショウ したが(う)
兽 shòu	獣	ジュウ けもの
纵 zòng	縦	ジュウ たて
肃 sù	粛	シュク
°处 chǔ, chù	処	ショ
°将 jiāng, jiàng	将	ショウ
°奖 jiǎng	奨	ショウ
°证 zhèng	証	ショウ
迭 dié	畳	ジョウ たたみ, たた(む)
让 ràng	譲	ジョウ ゆず(る)
酿 niàng	醸	ジョウ かも(す)
°触 chù	触	ショク さわる, ふれる
进 jìn	進	シン すす(む)
°齐 qí	斉	セイ
节 jiē, jié	節	セツ, セチ ふし
°摄 shè	摂	セツ
迁 qiān	遷	セン
战 zhàn	戦	セン たたか(う), いくさ
°践 jiàn	踐	セン
选 xuǎn	選	セン えら(ぶ)
°钱 qián	銭	セン ぜに
纤 xiān, qiàn	繊	セン
°浅 qiǎn	浅	セン あさい
专 zhuān	専	セン もっぱ(ら)
°禅 chán	禪	ゼン
°会 huì, kuài	会	カイ, エ あ(う)
层 céng	層	ソウ
总 zǒng	総	ソウ
窗 chuāng	窓	ソウ まど
续 xù	続	ゾク つづく, つづける

°对 duì	对 タイ, ツイ
°带 dài	带 タイ おび, お(びる)
洿 Lǒng, shuāng	洿 たき
°滞 zhì	滞 タイ とどこお(る)
泽 zé	沢 タク さわ
择 zé	択 タク
达 dá	達 タツ
°单 dān	单 タントン
°弹 tán	弾 ダン はずむ, ひく
°团 tuán	团 ダン, トン
迟 chí	遅 チ おく(れる), おそい(い)
°铸 zhù	铸 チュウ いる
°厅 tīng	厅 チョウ
听 tīng	聴 チョウ
征 zhēng	徴 チョウ
惩 chéng	懲 チョウ こ(らす)
适 shì	適 テキ テン
转 zhuǎn	転 ころがる, ころげる ころがす, ころぶ, デン
传 zhuàn	伝 つたえる, つたわる つたう
°图 tú	図 ト, ズ はか(る)
斗 dǒu, dòu	闘 トウ たたか(う)
读 dú	読 トウ, トク, ドク よむ
导 dǎo	導 ドウ みちび(く)
难 nán, nàn	難 ナン かた(い), むづか(しい)
°脑 nǎo	脳 ノウ
°恼 nǎo	悩 ノウ なや(む)
卖 mài	売 バイ う(る)
买 mǎi	買 バイ か(う)
发 fā	発 ハツ, ホツ
宾 bīn	賓 ヒン
废 fèi	廃 ハイ すた(れる), すたる
拂 fú	払 フツ はらう
佛 fó, fú	仏 ブツ ほとけ

铁	tiě	鉄	テツ
°边	bīan	辺	ヘン あた(り), ペ
°变	biàn	変	ヘン か(わる)
辩	biàn	弁	ベン
办	bàn	弁	ベン
辨	biàn	弁	ベン
丰	fēng	豊	ホウ ゆた(か)
药	yào	薬	ヤク くすり
译	yì	訳	ヤク わけ
°与	yǔ, yǔ, yù	与	ヨ あた(える)
样	yàng	様	ヨウ さま
览	lǎn	覧	ラン
滥	làn	濫	ラン
龙	lóng	竜	リュウ
两	liǎng	両	リョウ
猎	liè	猟	リョウ
类	lèi	類	ルイ
垒	lěi	塁	ルイ
泪	lèi	涙	ルイ なみだ
灵	líng	霊	レイ, リョウ たま
龄	líng	齡	レイ
历	lì	曆	レキ こよみ
历	lì	歷	レキ
°劳	láo	劳	ロウ
录	lù	録	ロク

註：上にあげた対照表の注意事項。

(一)漢字の順序は五十音順である。

(二)〔○〕のついているものは大同小異の略字である。

(三)日中両国双方ともに繁体漢字を簡略化したものはできるかぎり本表に収録している。

(四)双方のうち、一方は簡略化しているが、他方はまだ簡略化していないものは収録していない。

上掲の日中両国の略字対照表により、私たちは大同小異の数十個の略字、とくに“対”と“対”，“辺”と“辺”，“単”と“單”，“写”と“写”，“与”と“与”，“变”と“變”，“斤”と“斤”，“压”と“压”，“画”と“画”，“榮”と“榮”などは一点一画の差，あるいは一画の延長にしかすぎないことがわかる。このようなごく小さな違いは簡単に統一できるのである。がから、日本の一部の学者たち，国語問題専門家および国会議員たちは，中国と共同で漢字の簡略化問題を研究することを主張するのである。

数年前，参議院議員小柳勇氏が〈国字略字化懇話会〉を組織し，中国の現行の略字を参考にし，当用漢字の中の漢字をまず300字簡略化するという〈試案〉を提出した。その理由は，(一)当用漢字の中には書きにくい漢字がたくさんあり，それが一般の小中学生に学習上の困難を与え，漢字嫌いの傾向を生み出させるのである。(二)テレビの普及がめざましい現在，筆画の多い漢字はテレビでは非常に使いにくい。(三)中国側では現在すでに多くの略字ができており，日中両国が共同で研究を行なうことで漢字の統一を促進させることができる。しかし，国会の文教委員会や国語審議会は中国の後に追従して急速に漢字を簡略化することは妥当ではなく，慎重に考慮すべきであると考へた。とくに中国の〈第二次漢字簡略化草案〉(1977年)が公布されると，“雪”は“ヨ”に，“私”は“ム”に，“道”は“辺”に，“顔”は“彦”に簡略化された。こうなってくると，日本でもし中国のこのような略字を採用したとすれば，日本語中の漢字を混乱させるばかりでなく，日本語中の片仮名をも混乱させてしまう。事実上，これはできないことである。しかしながら，両国が共同で努力して，両国で現在すでに使用されている一部の略字，たとえば上述した一点一画の違いだけできわめて類似している略字を統一させることは非常に簡単なことである。問題はこれらの略字はそれぞれの国の中で“定着”化してきており，どちらがどちらに従って変更するのか，これは両国の当局者たちが共同で検討することで，その解決を待たなければならない。

(B) 略字統一の問題点

本来，日本の当用漢字の中の一部の略字は，昔の旧体漢字の中の俗字からきている。それらの俗字は昔は一般の知識人は公式の場所では用いなかったから，その字はあるが用いられることは非常に少なかった。戦後，日本政府は当用漢字を公布する時，一部分の俗字を繁体字のかわりに採用したが，その後，中国文字改革委員会も《簡化字総表》の中で一部の俗字を採用した。したがって，両国の略字の中で数十の字体が完全に同じ字がみられ，実際これはすべて同じところから出た俗字である。

俗字以外の新しく簡略化された漢字は，両国の簡略化方法が同じくないことから，その簡略化された字形はそれぞれ異なり，したがって，漢字の統一性を混乱させることになった。

漢字の特徴は〈形〉〈声〉〈義〉の三つを兼ねそなえていることである。とりわけ〈形〉と〈声〉の関係は最も密接である。中国では漢字簡略化の時，前節で述べたとおり，一種の形声字簡略化法を使用した。漢字簡略化の際にその声旁を読むことができさえすればよいというものである。

たとえば“極”→“极”は，“及”の発音が“jí”であり，これは“極”の発音“jí”とまったく同じだからである。また“藝”→“艺”は，“乙”の発音が“yì”であり，これと“藝”の発音“yì”とがきわめてよく以ているからである。しかし日本語では，そうはいかない。

日本語の中の“極”の音読は“キョク”であるが“及”の音読は“キュウ”である。“藝”の音読は“ゲイ”であるが“乙”の音読は“オツ”（あるいはイツ，イチ）である。その発音はまったく異なっているのだから，どうして中国の形声字簡略化法で漢字を簡略化することができるだろう。

日本の漢字簡略化の主な方法は字体の中の一部の筆画が比較的多い部分を省略してしまうことである。たとえば“藝”はその首部の“艹”と末部の“云”を合成して“芸”という字にした。しかし“芸”という字は本来ある字で，音読は“ウン”といい，“芸香”という一種の薬草があったので，国語審議会が“藝”を“芸”に簡略化する時，一部の学者たちの反対にあった。しかし当時の国語審議会の解釈は，当用漢字の中に“芸香”の“芸”という字が無いのだから，“芸”を“藝”の略字にしてもかまわないというものであった。²⁹⁾

“藝”は，私たちの日常生活の中で最もよく用いる字である。多くの中国文芸界の代表たちが日本を訪ずれた際，“文芸”とはどういう意味かわからず，逆に，多くの日本の学術界の代表たちが中国を訪ずれた際，“艺术”とはいったいどういうものかわからない。同じに漢字を使用する国の人々がそれぞれの漢字の意味を知らないということは，まったく両国の文化交流の上で“不幸”なことである。

両国がすでに簡略化した漢字，とくに字体の差が非常に大きい漢字を統一しようとすることは，むずかしいばかりでなく，ほとんど不可能に近い。日本の《当用漢字々体表》が公布されてからすでに三十年以上になる。中国の《簡化字総表》の公布も，十五，六年前のことである。両国はそれぞれの略字の使用にもう慣れて，しかも字形が大いに異なる略字，たとえば日本の“竜”と中国の“龙”，日本の“沢”と中国の“泽”，日本の“売”と中国の“卖”などの字は，すでに自国の書籍刊行物の中に固定化されており，もし再び統一しようとするれば，大混乱をひきおこすであろうことは目にみえており，しかもその必要はない。

要するに，両国の漢字の用途と性質の違いから，その統一は非常にむずかしい。

（C）限度のある略字の統一

最近，日本政府が公布した《常用漢字表》には，1,926字の漢字がある。また一方，中国科学院は1977年10月に，七，八千の漢字を整理して圧縮した。たとえば同音字の“湖”，“糊”，“蝴”，“瑚”“醐”はすべて“胡”におきかえた，同義字“瞰”を“看”に，“憤”を“忿”にした。こうすれば，3,200字あれば充分である。³⁰⁾もしそうであれば，日中両国の常用漢字数は以前に比べて大いに接近したといえる。どのようにしてこの二，三千字の漢字の一部分の字体を統一化するのか，これはまさに，今後の両国の文化交流の一大課題である。

前節で述べたとおり，両国のすでに簡略化された字体を統一するのは，きわめてむずかしい，

しかしながら、まだ多くの簡略化されていないか、あるいはすでに簡略化されたが、簡略化された筆画が非常に少ないか、簡略化されたそれぞれの字体がきわめてよく似ている字という字がある。このような字を両国の言語文字学専門家たちがえらび出し、共同で研究し再び簡略化すれば、それは実に有意義なことである。たとえば、中国でまだ簡略化されていない“碎”、“巢”、“假”、“拂”、“佛”、“醉”などの字は、日本の当用漢字の中の略字、“碎”、“巢”、“仮”、“払”、“仏”、“醉”などを採用することができる。すなわち“碎”→“碎”、“巢”→“巢”、“假”→“仮”、“拂”→“払”、“佛”→“仏”、“醉”→“醉”とするのである。逆に日本にもたくさんのまだ簡略化されていない字、“億”、“興”、“無”、“鋼”、“養”、“飛”、“導”、“熱”、“動”、“選”、“講”のような字がある。これらの書きにくい繁体字は中国側ですでに簡略化された字を採用して簡略化することができる。すなわち“億”→“亿”、“興”→“兴”、“無”→“无”、“鋼”→“钢”、“養”→“养”、“飛”→“飞”、“導”→“导”、“熱”→“热”、“動”→“动”、“選”→“选”、“講”→“讲”というようにである。もし双方がこれらの限度のある繁体字を統一して簡略化することができるとしたら、少なくとも日中文化交流についていえばきわめて大きな貢献である。

五 日中両国の漢字の未来と展望

(A) 中国の文字改革の急進化に対する評価

中国の文字が改革を必要とする理由は、表意の漢字がすでに時代の要求に適応しないと考えるからである。もし表意の漢字を表音文字に改めるとすれば、記憶、閲読、手書きしやすいばかりでなく、印刷、テレビなど近代の通信手段においても円滑に使用でき、それ以外にも、さらに中国語の中の一部の孤立した語を複合語に転化することもできる。これは中国の教育を普及させ、文化の発展を促進させるのにその貢献は非常に大きい。しかし表音文字の実施は中国各地の方言の統一を待たなければならない。これは理想としかいいようがなく、現実には不可能なことである。したがって、中国当局はまず漢字簡略化から着手することによって、繁体字を使用する困難を少なくするしかない。このように見ると、漢字簡略化は中国の文字改革における手段であって、目的ではないといえる。中国の文字改革の最終目的は表音文字への道を進むことである。ということは、漢字の簡略化はただ文字革改の過度期の産物にすぎず、最後には消滅していく運命にあるといえるのである。

簡略化された漢字は、表音文字にむかう推進期の暫時のものであるとすれば、大なたを振って簡略化するほどの必要はない。それは表意文字と表音文字がまったく関係のないものだからである。どのように簡略化された漢字であろうと、結局は表意文字であって、表音文字ではない。もし略字を表音文字に転化させるとしたら、結果はそれは繁体漢字を転化してできた表音文字とまったく同じである。私たちは略字を転化させた表音文字は繁体漢字より易しいということができないし、繁体漢字を転化させた表音文字は略字に比べてむづかしいということもできない。

中国文字改革委員会は永年の研究を通して検討した結果、ついに1964年に《簡化字総表》を公布し、2,000余字を簡略化した。一度にこんなに多くの字を簡略化したのは、歴史上かつてなかったことである。略字が公布されると、非常に多くの人々が読み書きで困難を感じたが、しかし日がたつにつれ略字にも慣れ、逆に非常に便利だと感じるようになった。これは中国文字改革の成功といえる。

1977年5月、中国文字改革委員会が公布した《第二次漢字簡化方案》には、第一と第二のふたつの表がある。第一表には簡略化された字が248字あり、第二表には605字あり、合計853字である。この853字は中国の常用漢字4,500字の中からえらび出され簡略化されたものである。このたび公布された略字は1964年に公布された《簡化字総表》の中の略字と異なり、少し簡略化がすぎるようで、漢字の本来の形体を大きくかえている。たとえば、“能”→“𠂔”“弱”→“𠂔”“微”→“𠂔”、“象”→“𠂔”などであって、このように過度に部分的省略がおこなわれたら、人々はそれらの意味を識別することがむずかしい。また前節で述べた“雪”→“ヨ”“私”→“ム”という簡略化は、さらに漢字の形体をでたらめにした。このように簡略化するよりは、むしろあっさりとローマ字表音文字で書く方が便利かつ実用的だとさえ感じる。

中国の現在の刊行物の漢字排列は左から右に横に印刷されており、中にローマ字表音文字を挿入することは非常に容易なことである。たとえば“中国現在没有ム立大学”は“中国現在没有sīlì大学”と書いた方がましだし、“昨天下了一场大ヨ”は“昨天下了一场dàxuě”とした方がましである。その方がより便利であり実用的だと感じる。

あるいは漢字の語句の中にローマ字表音文字を挿入するのは反対で、まったくみっともないと考える人もいるかもしれない。しかし現在では、それは、ふだんによく目にするものである。たとえば自然科学の論文の中では、漢字の語句と西洋語が並列されている例がたくさんあり、人文科学の論文の中でも、往々にして西洋の人名や地名をうまく訳出できなくて、原名をそのまま書きうつすことがある。したがって、漢字の語句の中にローマ字表音文字を混入することと西洋文を混入することとはまったく同じだから、どうしていけないことがあるのか。

漢字の語句の中にローマ字表音文字を混入した場合、その結果として三つの長所があげられる。

- 一、初步にローマ字表音文字を導入して表音文字の言語にむかわせる。
- 二、中国各地の方言と異音を早急に統一させることができる。
- 三、漢字簡略化に頭を痛め、時間をつぶやす必要もなくなる。

1958年に中国の《漢語拼音方案》が公布されると、何人かの人は中国語をこの表音方案の規定にそってローマ字で綴ったことがあるが、しかし中国の方言が統一されていないので、一度を廃棄して表音文字を採用することはむずかしかった。そこで漢字簡略化の道を進むことになったのである。しかし、漢字の語句の中に若干の表音文字を挿入し、一種の漢字と表音文字の混合体をつくることは、日本語の中の漢字と仮名を同時に用いるやり方と同じである。このようにして一步一步とやっていけば、私はきっと非常によい効果を収めるに違いないと思う。しかも、

このようにやっていくと、一方では漢字の一部あるいは大部分の暫時の存在を延長継続させることができるので、表音文字に慣れない人にとっても、ゆっくりと表音文字になじませることができ、また一方では、次の世代の中国人に多くの時間を浪費させてそれらの書きにくい漢字を覚えさせなくてすむ。

漢字の語句の中に表音文字を挿入することは、その状況をみながら少しずつふやしていくことができるわけで、やがては完全に漢字のかわりに表音文字を使用することができる。もしこのようにやらないで、いかに漢字を簡略化して最後に一挙にそれをすてきって、表音文字におきかえようとしても、それは理想にしかすぎず、結局実現はむずかしい。

漢字を表音文字への道に進ませることを決意するからには、漢字は一定限度の簡略化を行なえばそれで充分である。《第二次漢字簡化方案》の略字のように簡略化し、しかも一度に800字あまりも公布するのは、あまりにも性急すぎである。しかも簡略化された800字あまりの中で、実際に実施されにくいものもあれば、すでに実施されていて、途中で廃止されたものもある。このような混乱をひきおこすならば、公布しない方がましである。

文字は人と人との間の思考や意見を伝達する手段であって、ただ一方的にそれを使用することばかりにかまけて、他方でそれを受入れることができるかどうかということには一向にかまわない。その結果、文字の存在価値は失われてしまう。したがって、文字の改革は慎重で足を地につけて一步一步と推し進めていかななくてはならないのであって、けっして急ぎすぎても、さらにはひとつの命令で人々に実行を強制させるようなものでもないのである。

(B) 日本の漢字に対する処理の問題

日本語が中国語と異なっている点は、日本語の中の漢字は、いわば借用しているだけで、漢字を使わず、仮名だけでも意味を完全に表現することができるということである。今では電信であろうがテレビであろうが、すべて仮名で語意を伝達している。だから、日本で漢字を廃止しようとするれば、あきらかに中国よりはやりやすい。問題は一般に日本人の漢字に対する愛着が現在の中国人よりも強烈なことである。これは日本民族が古い文化や古い伝統をよく保存しようとする性格を有しているからであるということがいえよう。言語に限らず、文物制度、風俗習慣をとってみても、唐宋時代のもので、中国では現在すでにすっかりすたれてしまったものが、日本には時としてまださがし出せるものが多くある。

日本では、早く明治初期にローマ字会、仮名字会などが組織された。その目的は漢字を廃棄して完全にローマ字を、あるいは仮名を使用することであるが、しかしこれらの理想は今日に至っても依然として実現はむずかしい。今後の日本語の趨勢は、おそらく依然として漢字と仮名の混合体を継続し、けっして短期間のうちに漢字を廃棄することはないだろう。

第二次世界大戦後、日本はアメリカ軍に占領された。当時、占領軍司令部は日本が侵略戦争を推進したのは、一般民衆が漢字のさまたげを受け、西洋近代の民主精神が理解できず、情報や知

識を伝達しにくいからだと考えた。そこで、日本の文部省は、戦争中に大量に使用した漢字数を減らすことに着手し、1,850個の当用漢字を制定し、また音訓表も同時に公布した。しかし、今日にいたって、当用漢字だけでは充分ではないとの考えから、《常用漢字表》を制定し、漢字を1,926字に増やした。このような漢字に対する処理の態度と方法は、新中国が現在進んでいる道とは完全に反対の方向であるのは、どうしてだろうか。

今日の中国の学者たちは、中国の教育や科学技術が立ち遅れた大きな原因は、中国が漢字を使用し、表音文字を使用しないところからきていると考えている。これは多くの日本の学者たちの漢字に対する評価とまったく異なる。日本の学者たちは一、二千字のきめられた数の漢字と仮名をあわせて用いると、いろいろな語彙をつくることができ、これは日本の教育と文化の進歩をうながせるばかりでなく、日本の昔から漢字を使用してきた伝統を保存することができると思われる。漢字を使用している日本の实际情况をみると、現在の日本の科学技術は、欧米先進諸国に追いついたばかりでなく、いくつかの点では追い越してさえいる。教育普及ということから見ると、義務教育は九年で、自分の名前を漢字で書けないという日本人は一人もいない。高等学校卒業者は全国人口の八割を占め、典型的な文化国家といえる。もちろん、私たちは、それは漢字が日本文化の水準を高めたからだとはいえないが、少なくとも漢字が日本文化の前進をはばんだということとはできない。

日中両国の漢字に対する評価の違いから、漢字の廃止、漢字の簡略化についての意見もそれぞれ異なる。将来、世界で漢字を使用する国は、おそらく日本だけになるだろうという人がある。この言葉は理由のないことではない。現段階において、日本当局は漢字の廃止については考えていないが、漢字の実用という点では、中国の現在おこなわれている略字を重視している。当用漢字の中の繁体字を、中国の略字のように簡略化するよう主張する人々もいるが、他方、盲目的に中国の略字に追随すべきでないと考える人々もいる。とくに中国が漢字の簡略化を急進的に推し進めているので、いくつかのすでに簡略化された漢字は日本の学者には受け入れられない。当用漢字の簡略化は、慎重な態度で、よく考えたのちに、これを行なうべきであると考えている。

結 語

漢字は日中両国共通の文化遺産である。両国の千数百年来の友好往来は漢字をかけ橋としている。しかし、西洋の表音文字の文化が東進してきて以来、表意文字の漢字文化は挫折し、そこで漢字廃止の声が方々でおこり、漢字の存亡は非常に大きな危機に面している。

漢字は中国の古代原始農耕社会の産物である。殷王朝統治階級は、彼らの運命の吉凶をうらなうために、漢字を使って記録した。したがって、漢字は本来統治階級専有のものであったということができる。

中国の農耕社会の継続とともに、漢字は広まった。しかし、今日に至って、農耕社会から産業社会に入り、生産技術が進歩し、貿易が盛んになり、人と人との往来が頻繁になってくると、意

志伝達的手段である漢字は、時代とともに継続していくことが非常にむずかしい。いいかえれば、時代によって淘汰されようとしているのである。

しかし、中国文化の伝播と隆盛は、すべて漢字のおかげである。日本は中国の漢字と文化を吸収し、大和民族の文化を創りあげた。漢字は日中両国の伝統文化の根源であるといえる。もし漢字が絶滅したとすれば、日中両国のおのの伝統文化は、現代文化との間に隔絶をおこすばかりでなく、日中両国の文化間の交流に非常に大きな障害をもたらすことになるだろう。

文化伝統と文化交流の観点から見ると、漢字の存在はきわめて大きな意義を持つ。しかし実用と便利さということからみれば、漢字は時代の要求に適應することができない。したがって、漢字の存廃問題については、私たちがどのような立場に立つかによって決まる。

日本は《漢字音訓表》を公布し、中国は《漢語拼音方案》を公布したが、その目的はともに漢字を将来表音文字の道に進ませるためである。しかし、現実の状況の下では、中国であろうが日本であろうが、漢字を即座に廃止することはむずかしい。

中国で漢字を廃棄するという主張は日本より積極的であるが、全国各地の方言と語音が統一されていないことから、ローマ字表音文字を実行するのは非常にむずかしい。そこで、漢字形体の簡略化を推し進めて、過渡期の文字改革とするしかない。日本では、漢字は仮名の中にまじっていて、完全な表意の文字ではないので、漢字を廃止するとしても中国よりやりやすい。しかし当面の日本は、漢字の廃止問題を少しも考えていない。児童の漢字学習上の困難を避けるためには、可能な範囲内で漢字の使用量を減らすしかない。これが、現在の日本の漢字処理の方針といえる。

要するに、日中両国は現在、漢字を使用している唯一の国である。中国は現在大量に漢字を簡略化しているが、日本への影響は非常に大きい。以前、中国の書物を読むことができた日本の学者たちは、略字の場合、その意味を理解するすべもない。さらに十年あるいは二十年たてば、中国の次代の青年たちでさえも、繁体漢字がわからないだろう。このようにしていくと、現代文化は、伝統文化と隔絶していき、日中両国の文化交流もきわめて大きく阻害されるだろう。

日中両国の文化交流のかけ橋である漢字を維持するために、私たちは、両国の言語文字学者たちが漢字簡略化の問題を共同で研究し、共同で討論できることを願ってやまない。この願いにもまだ多くの困難があり、簡略化された漢字の統一もほとんど不可能に近いが、しかし、私たちは漢字がまだ存在するうちは、漢字がその国際性をしっかり保っていることを願うのである。

註

- ②② 慶応義塾編纂《福沢諭吉全集》(昭和44年, 岩波書店) 第三卷 p.555。
- ②③ 文化庁編《漢字》(覆刻文化庁シリーズⅥ) p.12。
- ②④ 同上。
- ②⑤ 同上 p.59～75。
- ②⑥ 1977年1月8日《朝日新聞》に見える。
- ②⑦ 国語調査委員会編《漢字要覧》p.23～24, (明治41年, 東京)。
- ②⑧ 郭沫若の論文〈日本の漢字改革とその文字の機械化〉(1964年5月3日《人民日報》に見える)。
- ②⑨ 同註 ②③ p.297。
- ③⑩ 1977年10月7日《光明日報》に掲載された〈文字改革〉に見える。